

メディア文化とナラティブ・アイデンティティ ——文化的物語の上演とアイデンティティの生産——

Media Culture and Narrative Identities: Constructing Cultural Narratives

辰巳 遼

要旨

The problem of identities has been discussed in various fields for a long time. However, the term identity had become more complicated in today's globalized world. This paper explores the connections between identities and narratives, because narrative seems key to understand what identities are. It also examines how we construct our identity based on media culture. Media is key to understand how we define ourselves as well. We all express ourselves in our culture through narratives. This perspective will show us a way of looking at recent cultures and identities in this complicated global world.

【キーワード】メディア、物語、アイデンティティ、文化、意味

はじめに

構造主義の時代を経て、アイデンティティの問題はあらゆる学問領域で議論が繰り返されてきた。しかしながら、グローバリゼーション、多様性を重要視する昨今の状況において、アイデンティティの問題は、これまでとは全く異なる仕方で問われるべきである。複雑かつ混成的で、変容もしていくアイデンティティを理解するためには、人々の心理や感情といった内面的側面と社会的側面の両面を見ていく必要があるだろう。この研究ノートでは、グローバリゼーションにおける諸問題やアイデンティティの問題に取り組む理論的視点を提供するために、アイデンティティを生産する主体と社会をつなぐ「物語」に焦点を当てる。なぜなら物語はわれわれが文化のなかで生きる仕方そのものといえるからである。

1. 物語の上演と意味の共有

ロラン・バルトは『物語の構造分析』において、「物語はコミュニケーションの伝達物」(36)であると述べたが、物語は語り手と受け手によって構成され、他者と意味を交換する場となる。ここでいう語り手とは、作者やナレーターのことだけではない。語り手とは物語の内部にも存在し、物語を語る人物、あるいは登場人物のことでもある。

そして物語は小説や映画の世界だけではなく、歴史や絵画、会話、記事、建築物、ファッション、そして音楽のなかにも存在し、日常とともにある。それゆえ物語はつねにわれわれとともに存在しているといえる。

物語をもたない民族は、どこにも存在せず、また決して存在しなかった。あらゆる社会階級、あらゆる人間集団がそれぞれの物語をもち、しかもそれらの物語は、たいていの場合、異質の文化、いやさらに相反する文化の人々によってさえ、等しく賞味されている。物語は、良い文学も悪い文学も区別しない。物語は人生と同じように、民族を越え、歴史を越え、文化を越えて存在する。(バルト 2)

物語がすべての民族、社会階級、集団に共有されるものであるとすれば、物語は人と人との間を横断して存在するものである。日常生活のなかで、意識的、あるいは無意識的にわれわれは物語に接近し、また身に着けてもいる。物語はコミュニケーションする場であり、<わたし>と<あなた>の関係が理解、共有できる枠組みとして、日常生活のなかですでに上演されているのである。

われわれはたとえ他人にみられていない一人の状況であっても、劇作家、演出家、役者、観客として何かに同一化した自己を演じていて、いつも物理的にそこにある以上の何者か、あるいは想像的な存在である。なぜならわれわれが<演じる人間>、上演する人間であるからだ『メディア時代の文化社会学』のなかで吉見俊哉は言う(261-62)。

われわれは社会的な何者かとして存在するために、つねに他者に同一化した自己を演じている。同一化は精神の動きであるが、現実の上演によって主体は社会的言説へと流れ込む。つまりわれわれは他者に同一化し、実際に他者としての自己を上演することで、自分が何者かということを他者とともに認識するのである。

ロジャー・シルバーストーンは、われわれの生やアイデンティティはいつも上演(performance)に依存していると主張する。それらは上演されることで実感され、現実のものとなる。上演によってわれわれが現実へと入っていくというこの観点からすれば、社会的なものは意味の網目である。この網目は、織りなす意味が共通のものとして保持される限り、つまり反復され、共有され、コミュニケーションされ、そして課される限り、維持される(Silverstone 70)。現実はつねに上演されており、そのことが意味を維持しているのである。われわれは観客として、テレビやイベント、話し手などを通して上演に触れ、そして今度は上演者としてその現実に参加する。われわれの生やアイデンティティは、意味の網目、すなわち日常のテキストや言説のなかで、いかに上演されるのかにかかっている。

この点において、上演とはシルバーストーンの言う「媒介作用」そのものであり、意味を共有させ、共通の経験を構築する「大衆の領有行為」(Silverstone 74)なのである。¹⁾しかし、「大衆の領有行為」のなかで、われわれはどのように自己の意味を再生産すればよいのだろうか。

われわれはメディアに媒介された身体として、上演によってリアリティを経験し、様々な意

味を生産、再生産すべく表象し、表象され続けている。だから自己を再表象させること、つまり同一化と上演の実践を戦略的に捉えることで、自己の意味を再生産させることも可能だろう。

特に抑圧されたマイノリティにとっては、映画や舞台、音楽、ダンスといった上演によって既存の社会的言説の流れのなかに自らの主体を連鎖化させること、同一化と上演による実践をいかに行うかが重要であった。そしてその実践を成り立たせている場、コミュニティにおけるルールがつくられる場、意味を交換するため無意識にわれわれが参加している上演の舞台としての場が物語なのである。

日々の上演というパースペクティブには物語が欠かせない。われわれは断片的な物語のなかで生きており、日常生活を構造化している。ここでいう物語とは、主体が上演の外側に位置して操作できるようなものではなく、台本をただ演じて反復していくものでもない。吉見の『都市のドラマトウロジー—東京・盛り場の社会史』による上演論パースペクティブを援用すると、ここでの物語の上演という視点は、上演される役柄以外に自由な主体を認めないし、上演を単なる台本の尾行とも見なさず、むしろ自由に生きる主体が上演の一契機として現れるのであり、またその現れ方も上演自体のなかで変化する(29)。上演はそもそも物語のなかに現れるのであって、物語の外側に自由に生きる主体が構成されることはない。つまり物語は自由に生きる人々の関係性を規定し、社会における秩序のバランスを保たせている。性別や民族などのある特定の自己として生きるべき道は、他者の場に位置しているメディア・テキスト、ドラマやシナリオといった物語の上演のなかに委ねられているのである。そのためアイデンティティを生産しえる場には物語がある。

物語はわれわれに参加するよう呼びかけてくる。

Stories need audiences. Stories need to be heard and read, as well as spoken and written. There is also a claim for community within the telling, a wish for participation, a drawing in, a suspension of disbelief, an invitation to move into and to share, however briefly, another world... They are an essential part of social reality, a key to our humanity, a link to, and an expression of, experience. We cannot understand another culture if we do not understand its stories. We cannot understand our own culture if we do not know how, why and to whom our own storytellers tell their tales. (Silverstone 40)

物語は人々に聞かれ、読まれ、話され、また書かれることで、共有される社会的現実を構築していく。そして物語が社会的現実を生きる人間性の鍵であるならば、物語はわれわれにどのように社会で生きていくべきかを提案し、導くものである。

シルバーストーンによればわれわれは、自分自身を位置付けるため、あるいはプロットを追うためにキャラクターやトーンに同一化し、模倣のために物語を受容する力を持ち出したり、持ち出さなかったりする(41)。われわれが同一化する対象は、いつも物語の内側に現れる。²⁾

シルバーストーンはさらに *Why Study the Media?* の8年後に出版された *Media and Morality* において次のように論述する。

Indeed narrative, as I have already briefly indicated, is central for an understanding of the media's role in the creation of a public space for deliberation and judgement. It is through narrative that the world appears in its vividness and in its capacity to create and sustain significance. It is in the stories we tell ourselves, the historical and contemporary as well as the fantastic, that we seek and sometimes find the shareable meanings that create the possibility for a shared understanding of the world. Narratives are inclusive even through they exclude. (Silverstone 52)

物語は人々の行為や感覚を繋ぎ合わせるメディアの最も重要な役割を果たしている。この見方では物語なしに世界を見たり、理解したり、解釈したりすることはできないということになる。

同時に物語は、あらゆる感情を意味として提供し、共有する場を構成する。怒り、哀しみ、喜び、愉みといった様々な感情は、強力なコミュニティを創り出し、公と私を混同させる。国家の悲劇は国民の哀しみ、都市の喜びは住人たちの喜びだと表現されるように。集団のなかの自己、すなわち物語を自己の物語として上演することで、われわれは他者の現実を生きる。

このようにあらゆる物語はコミュニケーションの産物であり、ある種のコードに基づいて展開されていて、社会や文化を認識する枠組みである。われわれが他者へ同一化し、上演することができるのは、意味を共有、交換する枠組みとしての場である物語があるからだ。

2. 脱物語の上演

政治学との関連のなかで物語を分析したモウリーン・ホワイトブルック(Maureen Whitebrook)は *Identity, Narrative and Politics* において、物語するという人々の基本的な活動に基づいて構築されるアイデンティティのことをナラティブ・アイデンティティと呼び、人は物語を通して自分自身の日常や人生を理解すると述べる(Whitebrook 9)。われわれの自己は、ナラティブ・アイデンティティとして人々に絶えず物語られることで、自身の人生を物語として理解する。つまり

身体の内レーションとして自己を物語ることは同時に物語られることであり、他者である対象の経験を上演することである。したがって自己を物語ることは、アイデンティティを生産することへとつながっていく。

しかしながら、物語はある種の言説として、特定の空間を囲いつつ歴史や制度とともにある。アイデンティティの再生産は、歴史や制度の上に成り立ちながらも、同時にそれらを変容させる契機として実践される必要があるだろう。そのために物語は再編されなくてはならない。脱物語化された物語を上演しなければならない。

再編された脱物語は、理想の姿である幻影的自己を映し出す。つまるところ、物語る自己とは、保証されたものではなく、つねに他者と自己の間で想像される脱物語上の幻影なのである。

スチュアート・ホールはアイデンティティについての論のなかで次のように述べる。

They(identities) arise from the narrativization of the self, but the necessarily fictional nature of this process in no way undermines its discursive, material or political effectivity, even if the belongingness, the ‘suturing into the story’ through which identities arise is partly, in the imaginary (as well as the symbolic) and therefore, always, partly constructed in fantasy, or at least within a fantasmatic field. (Hall 4)

自己の物語化—物語る身体として自己を上演すること—はいつも幻想性を含んでいる。ホールはアイデンティティのプロセスのひとつ—「物語への縫合」—が部分的に想像界に所属すると説明しているが、それは物語る自己がいつも幻影にすぎないからである。

ニュースやインターネット、映画、新聞、絵画、音楽のようなメディアが人々に提示しているものは、他者と共有することのできる想像上の物語や作品、そしてその場に参加するよう呼びかけられた幻影的自己である。メディアによって構成される幻影的な自己に同一化することで、また集団内で脱物語化されたメディア・テキストのなかで幻影的自己を上演する過程を通じて、われわれはアイデンティティを再生産することができる。

われわれが参加している物語はいくつかに断片化されてはいるが、複雑に交錯しあいながら、自己を認識する術を与えている。われわれはいつも仕事や家庭、恋愛、学問、趣味など、それぞれの物語に参加しており、ある目的や結末に向けて進んでいく。それらの物語は幻影的な自己へと動機づける。

この脱物語を上演する幻影こそ、不安定な主体を唯一支えることが可能な、主体と現実のバランスを取り持つメディアだということである。メディアは物語を伝達し、構築もする。想像的なものであれ、物語はリアリティを形づくる道標となるし、それがわれわれの日常であると、

リアリティであると判断させるのもまたメディアの役割である。メディアの媒介作用のなかで、脱物語化し、自己を上演することが、社会的な意味としてのアイデンティティを再生産しえるのである。

ひとつの例として、2015年にサウス・カロライナで起きた事件をあげてみたい。アメリカ全体の問題となったこの事件は、大衆のなかの自己として多くの黒人たちが自らの意味を再生産しようと試みたケースである。

2015年の4月4日にサウス・カロライナで起こった黒人射殺事件には、白人警官であるマイケル・スレーガーが逃げる黒人に対して8回にわたって発砲した映像が残っていた。人種問題へと発展したこの事件は、カロライナという都市の問題として被害者と都市の悲劇を重ね合わせ、人種差別の歴史を呼び起こした。その2か月後、同じサウス・カロライナのチャールストンの教会で9人が射殺される事件が起きた。犯人は白人で21歳のディラン・ルーフという若者だった。ディラン・ルーフは黒人への嫌悪を明示しており、チャールストンを選んだ理由について、かつて黒人の比率が高く歴史的な場であるからだと主張した。さらにルーフはネット上で予め犯行を「宣言」していた。そこには、南北戦争時の南軍旗を持つ写真や、星条旗を燃やす写真もあがっていた(黒沢 Web)。またバークレー郡当局が投稿したルーフの写真は、アパルトヘイト政策時代の南アフリカや、白人支配が続いた旧ローデシア(現ジンバブエ)の国旗のワッペンを縫い付けたジャケットを着ているものであった。ルーフが攻撃の対象を黒人へと向けたのは、アメリカを黒人に乗っ取られないためだった。彼は銃を持った警官であるスレーガーの身体に同一化したのだろう。ルーフは使命感を持って一撃つということを一上演した。

一方6月19日のルーフに対する保釈審問で、被害者の娘は容疑者に対し「あなたは私を傷つけ、多くの人を傷つけたが、神はあなたを許し、わたしもあなたを許す」と述べたという(Ellis Web)。またNHK NewsWebの「米 黒人通う教会で白人が銃乱射 9人死亡」の記事によれば、マーティン・ルーサー・キング牧師の妻が設立した「キング・センター」はこの事件を受け、キングがかつてチャールストンの教会を訪れた時の写真を「キング牧師の魂、そして、その哲学に従い、私たちはいかなる人種差別、憎しみ、戦争、そして、暴力に強く反対します」というメッセージとともにネット上に投稿した(NHK NewsWeb)。ストリートでは“Black lives matter”と掲げられ、市庁舎にある南部連合の旗を降ろせと叫ぶ人々が練り歩く。さらに教会の前には多くの花が供えられた。

以下はアメリカの司法省の声明文である。

This heartbreaking episode was undoubtedly designed to strike fear and terror into this community, and the department is looking at this crime from all angles, including as a

hate crime and as an act of domestic terrorism. (qtd. Hartmann)

バラク・オバマ大統領は被害者たちの葬儀の場で、ドラマさながらに“Amazing Grace”を突如として歌い始め、被害者 9 人の名前を読みあげていった。ニック・ブライアントはその時の大統領の様子を、「説教」のような「最も記念すべきスピーチ」だと表現し、「まるでマーティン・ルーサー・キングが腹話術で話しているようだった」と述べる(Bryant Web)。“Amazing Grace”は、アメリカで最もポピュラーな曲のひとつで、移民国家としてのアメリカの歴史を物語り、苦難から栄光への道筋を示すものとして共有されてきた。そしてオバマが突然この曲を歌ったとき、その場に居合わせた人々もまた立ち上がって同じように歌い始めたのである。

サウス・カロライナの黒人たちは、かつてアメリカ中を動かした公民権運動の物語の中心にいた人物、キング牧師を共通して引き合いに出す。キング牧師はアメリカの理想、つまり神の導く理想郷と黒人をつなぐメディアとなったのである。そしてキングを通じた自分たちの—平等な社会、理想郷に住む—幻影的自己にサウス・カロライナの住民は同一化したのである。

だからオバマは、神の恩恵という宗教的な意味合いを持つ“Amazing Grace”を選んだのだろう。物語は怒り、悲しみを伴いながらその解決や治癒に至るまでの道筋を展開する。この事件の被害者の人種差別に端を発する悲劇は、サウス・カロライナという地域と一体化し、アメリカ国家としての悲劇となった。オバマを含めた黒人住民によって黒人とアメリカを結び付ける物語が、再び上演されたのである。

それぞれの登場人物は、それぞれの物語を生きており、黒人の歴史、アメリカの歴史を呼び起こしながら、自己を物語の一部として上演する。もし物語を生きていなければ、誰もキング牧師に言及することはなかっただろうし、被害者遺族が容疑者を許すと話すことなどなかっただろう。この物語の読み手は、ストリートに出て、花を供えることで、物語に参加し、悲劇を上演し、この事件によって生まれた哀しみと怒りの意味を共有した。

あらゆる権力に挟まれながら、人々は物語を上演していく。南部の白人にとって南軍旗は自らのアイデンティティを物語る象徴であったかもしれない。白人にとってそれは人種差別の象徴ではなく、ただ伝統として守り抜いてきた南部文化の象徴であったかもしれない。しかしサウス・カロライナの事件を報道はドラマティックに描き、物語として感情が共有されるように仕掛けていく。実際にこの事件以降、アラバマ州を皮切りに、南軍旗があらゆる場で撤去され始めた。Walmart や Amazon をはじめとしたインターネットでの旗の販売も中止が相次いだ。そしてサウス・カロライナのニッキー・ヘイリー知事は、白人優位を示すシンボルとしてルーフが旗を使ったことを受けて、旗を撤去するよう議会に求めたのである(LoBianco Web)。“Black lives matter”と街の至る所に書いたり、白人警官やヘイトクライムに抵抗したりするサウス・カ

ロライナの住民の声や身体は、報道を通して、いまだ根強く残る白人を中心としたアメリカの物語や南部の物語を再編する。つまり、サウス・カロライナの住民は、アメリカの物語を脱物語化したのである。しかしこれは、共有される意味の枠組み—それを脱構築するときでさえ—の内側でしか行われぬ。教会で9人の黒人を射殺したルーフは星条旗を燃やし、失われた白人のアメリカを再び物語ろうとしたのかもしれない。だが物語が再び語られるのは、理解しえるコンテクストにおいてである。なぜなら意味は共有されなくてはならないからだ。物語することはその経験によって集団と自己が結び付く瞬間であるからだ。サウス・カロライナに住む黒人たちは、アメリカの歴史、宗教的背景を語る場において、アメリカの脱物語を上演したことでアイデンティティを再生産しようと試みたのである。

3. 文化的物語と選択

メディア文化と物語とを結びつけて考えることは、音楽やテレビ、映画といったメディアが実質的にパフォーマンスなものとして、日常の場や政治的な場を形成するものとして考えることである。本稿の目的はそこにあったわけだが、政治的な枠組みのなかでの意味やアイデンティティの生産は雑種化するとともに国際化している。

グローバリゼーションのもとでは、多様な文化的意味が複雑に交錯しており、国際的な出来事や場所は、同時に多くの場所で多くの意味を生み出す。一度グローバリゼーションの波に触れた文化はそれぞれハイブリッドに構成されながらローカルな日常に還元されていく。

最後に、グローバリゼーションのなかで多様な文化的物語を上演するわれわれの生き方を捉えるひとつの視点を提供したい。現代において物語を上演するということは、人々が無意識に物語の上演によって立ち起こる文化をパフォーマンスに選択していることを意味する。

ゴードン・マシューズ(Gordon Mathews)は *Global Culture/ Individual Identity: Searching for Home in the Cultural Supermarket* のなかで、文化的アイデンティティはスーパーマーケットや図書館のような、いわゆる「カルチュラル・スーパーマーケット」において選択し、手に入れることのできるものだと述べる。しかしその選択とは、選ぶというよりもむしろ使用し行為すること、すなわちパフォーマンスに得られるものである。

There is also the realm of use. We fashion ourselves from the cultural supermarket in a number of areas, among them our choices in home decor, in food and clothing, in what we read, watch, and listen to in music, art, and popular culture, in our religious belief, and in ethnic and national identity itself: whether, in the United States, to identify oneself as

Hispanic-American or as American; whether, in Hong Kong, to be Chinese or Hongkongese. (Mathews 21)

もちろん選択は自由ではない。グローバルに陳列される文化的商品は資本主義のなかで交換され、コカ・コーラやアメリカのセレブリティのようにマスメディアの影響を持つ場合が多い。だが「カルチュラル・スーパーマーケット」の構造はそう単純ではなくて、複雑で実体のない広大なものである。様々な情報やハイブリッドなアイデンティティは、至るところで見つけることができる。マッシュューズによれば、例えば図書室やラジオ、インターネット、Tシャツに書かれたスローガンなどは、すべて「カルチュラル・スーパーマーケット」に陳列されえるものであり、文化的アイデンティティの構成要素となりえるものである。

マッシュューズはまた「われわれはカルチュラル・スーパーマーケットのなかでホームを想像する」(Mathews 197)と記す。加えてわれわれには帰るべき文化のホーム、すなわち住居は存在しないと主張する。だからこそ物語の結末へと向かう理想の場が必要であり、グローバルで複雑な生産と消費のサイクルの内側で、住居としての身体を配置しなくてはならない。われわれはグローバルな場へと接続され、あらゆる物語を身に着けて生きている。

このような身体はつねにどこかを目指し、メディア空間を漂いながらグローバルな場へと編入されていく。元山は「物語を領地化するパフォーマティブな主体のいる場所、としての文化」において次のように言う。

われわれは移動する。場所から場所へと移動しながら、いつも場を目差す。場はたんなる場所ではない。場とは欲望充足の約束であり、語り聞き経験される物語をもとに想像される理想郷である。この場を、定住の場所としてさだめようとするとき、つまり身体を領地化するとき、われわれはアイデンティティを構成していく。(42)

文化が演劇的に構成されるパフォーマティブな文化だとするならば、われわれは生きる手法としての文化を選択し、その生きる場を特異化させる。例えばキング牧師の演説の場や、タハリール広場は人々が上演によって共有される意味を形成し、アイデンティティを生産する空間であり、物語である。物語は、いかなる文化変容の時でも、さらには政治的關係が逆転する時でさえ、われわれを動かす原動力となっている。残されている課題は、相容れないように見えるあらゆる対立関係をいかに共演させることができるのかということだろう。その間の鍵は、やはりわれわれを繋ぎ合わせるメディアにあるように思われる。

注

- 1) シルバーストーンの媒介作用 : Mediation involves the movement of meaning from one text to another, from one discourse to another, from one event to another. It involves the constant transformation of meanings, both large scale and small, significant and insignificant, as media texts and texts about media circulate in writing, in speech and audiovisual forms, and as we, individually and collectively, directly and indirectly, contribute to their production. (Silverstone 13) Silverstone, Roger. *Why Study the Media?*. London: SAGE Publications, 1999.
- 2) これはバルトが言語学との関与によって明らかにしたことでもあるが、われわれがいつも場面や状況に応じたことばを選択して使用しているのと同様に、われわれは物語を状況によって瞬時に持ち出す。

参考文献

- Bryant, Nick. "Obama honours Charleston shooting victims at funeral" *BBC News* 28 Jun. 2015. Web. 28 Jun. 2015.
- Ellis, Ralph. Greg Botelho, Ed Payne. "Charleston church shooter hears victim's kin say, 'I forgive you'". *CNN* 20 Jun. 2015. Web 20 Jun. 2015.
- Hall, Stuart. Introduction: Who Needs 'Identity'?, Ed. Stuart Hall, Paul du Gay, *Questions of Cultural Identity*. London: SAGE Publications, 1996. 宇波彰訳「誰がアイデンティティを必要とするのか」『カルチュラル・アイデンティティの諸問題—誰がアイデンティティを必要とするのか?』。大村書店、2000。
- Hartmann, Margaret. "Will Dylann Roof Face Terrorism or Hate-Crime Charges?" *NewYork* 26 Jun. 2015. Web. 26 Jun. 2015.
- LoBianco, Tom. "Alabama governor orders confederate flags taken down." *CNN* 25 Jun. 2015. Web. 25 Jun. 2015.
- Mathews, Gordon. *Global Culture/ Individual Identity: Searching for Home in the Cultural Supermarket*. NY: Routledge, 2000.
- NHK NewsWeb「米 黒人通う教会で白人が銃乱射 9人死亡」*NHK NewsWeb*。18 Jun. 2015、Web. 18 Jun. 2015。
- Silverstone, Roger. *Why Study the Media?*. London: SAGE Publications, 1999.
- Media and Morality: the Rise of the Mediapolis*. UK: Polity Press, 2007.
- Whitebrook, Maureen. *Identity, Narrative and Politics*. NY: Routledge, 2001.
- バルト、ロラン『物語の構造分析』花輪光訳。東京：みすず書房、1979。
- 黒沢潤「ネット上に犯行宣言か『黒人は劣等人種』他人種にも敵意むき出し、FBI 捜査」『産経ニュース』。21 Jun. 2015、Web. 21 Jun. 2015。
- 元山千歳「物語を領地化するパフォーマティブな主体のいる場所、としての文化」『SELL—第 29 号』京

都外国語大学英米語学科研究会、2012。

吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』。東京：新曜社、1994。

---『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』。人文書院、2003。

---『都市のドラマトウロジー—東京・盛り場の社会史』。東京：河出書房新社、2008。

---『「声」の資本主義—電話・ラジオ・蓄音器の社会史』。河出書房、2012。